

# 一房の葡萄

有島 武郎

僕は小さいときに絵を描くことが好きでした。僕の通っていた学校は横浜の山の手という所にありましたが、そこいらは西洋人ばかり住んでいる町で、僕の学校も教師は西洋人ばかりでした。そしてその学校の行き帰りには、いつでもホテルや西洋人の会社などが、並んでいる海岸の通りを通るのでした。通りの海沿いに立って見ると、真っ青な海の上に軍艦だの商船だのがいっぱい並んでいて、煙突から煙の出ているのや、帆柱から帆柱へ万国旗をかけた渡したのやがあって、目が痛いようにきれいでした。僕はよく岸に立ってその景色を見渡して、家に帰ると、覚えていられるだけできるだけ美しく絵に描いてみようと思いました。けれどもあの透きとおるような海の藍色と、白い帆前船などの水際近くに塗ってある洋紅色とは、僕の持っている絵の具ではどうしてもうまく出せませんでした。いくら描いても描いても本当の景色で見えるような色には描けませんでした。

ふと僕は学校の友達の持っている西洋絵の具を思い出しました。その友達はやはり西洋人で、しかも僕より二つくらい年が上でしたから、背は見上げるように大きい子でした。ジムというその子の持っている絵の具は舶来の上等のもので、軽い木の箱の中に、十二種の絵の具が、小さな墨のように四角な形に固められて、二列に並んでいました。どの色も美しかったが、とりわけて

藍と洋紅とはびっくりするほど美しいものでした。ジムは僕より背が高くせに、絵はずっと下手でした。それでもその絵の具を塗ると、下手な絵さえなんだか見違えるように美しくなるのです。僕はいつでもそれを羨ましいと思っていました。あんな絵の具さえあれば、僕だって海の景色を、本当に海に見えるように描いてみせるのになあと、自分の悪い絵の具を恨みながら考えました。そうしたら、その日からジムの絵の具が欲しくて欲しくてたまらなくなりました。けれども僕はなんだか臆病になって、パパにもママにも買ってくださいと願う気になれないので、毎日毎日その絵の具のことを心の中で思い続けるばかりで幾日か日がたちました。

今ではいつの頃だったか覚えてはいませんが、秋だったのでしよう。葡萄の実が熟していたのですから。天気は冬が来る前の秋によくあるように、空の奥の奥まで見透かされそうに晴れわたった日でした。僕たちは先生と一緒に弁当を食べましたが、その楽しいな弁当の最中でも、僕の心はなんだか落ち着かないで、その日の空とは裏腹に暗かったのです。僕は自分一人で考えこんでいました。誰かが気がついて見たら、顔もきつと青かったかもしれない。僕はジムの絵の具が欲しくて欲しくてたまらなくなりました。胸が痛むほど欲しくなりました。たのです。ジムは僕の胸の中で考えていることを知っているにちがいないと思って、そっとその顔を見ると、ジムはなんにも知らないように、おもしろそうに笑ったりして、脇に座っている生徒と話しているのです。でもその笑っているのが僕のことを知っていて笑っているようにも思えるし、なにか話をしているのが、「今に見ろ、あの日本人が僕の絵の具をとるにちがいないから。」と言っているようにも思えるのです。僕は嫌な気持ちになりました。けれども、ジムが僕を疑っているように見れば見えるほど、僕はその絵の具が欲しくてならなくなるのです。

僕はかわいい顔はしていたかもしれないが、体も心も弱い子でした。そのうえ臆病者で、言

1 【横浜の山の手】神奈川県横浜市にある地名。  
2 【万国旗】世界の国々の国旗を並べてロープなどをつないだもの。  
3 【藍色】濃い青色。  
4 【帆前船】帆で風を受けることと進む洋式の船。  
5 【洋紅色】鮮やかな紅色。

いたいことも言わずにすますようなたちでした。だからあんまり人からは、かわいがられなかったし、友達もないほうでした。昼ご飯がすむと他の子供たちは活発に運動場に出て走り回って遊び始めましたが、僕だけはなおさらその日は変に心が沈んで、一人だけ教場に入っていました。外が明るいだけに教場の中は暗くなって、僕の心の中のように。自分の席に座っていなながら、僕の目はときどきジムの卓の方に走りまわりました。ナイフでいろいろないたずら書きが彫りつけてあって、手あかで真っ黒になっているあの蓋を上げると、その中に本や雑記帳や石板と一緒にあって、あめのような木の色の絵の具箱があるんだ。そしてその箱の中には小さい墨のような形をした藍や洋紅の絵の具が……僕は顔が赤くなったような気がして、思わずそっぽを向いてしまふのです。けれどもすぐまた横目でジムの卓の方を見ないではいられませんでした。胸のところがどきどきとして苦しいほどでした。じっと座っていなながら、夢で鬼にでも追いかけられたときのように気ばかりせかせかしていました。

教場に入る鐘がかんかんと鳴りました。僕は思わずぎょっとして立ち上がりました。生徒たちが大きな声で笑ったりどなったりしながら、洗面所の方に手を洗いに出かけていくのが窓から見えました。僕は急に頭の中が氷のように冷たくなるのを気味悪く思いながら、ふらふらとジムの卓の所に行って、半分夢のようにその蓋を上げてみました。そこには僕が考えていたとおり、雑記帳や鉛筆箱と交じって見覚えのある絵の具箱がしまっていました。なんのためだか知らないが僕はあっちこちをむやみに見回してから、手早くその箱の蓋を開けて藍と洋紅との二色を取り上げるが早いか、ポケットの中に押し込みました。そして急いでいつも整列して先生を待っている所に走っていきました。

僕たちは若い女の先生に連れられて教場に入り、めいめいの席に座りました。僕はジムがどん

3 【教場】教室。  
6 【石板】石筆を使って文字を書くための石の板。学用品として用いられていた。  
18 【ポケット】ポケット。

な顔をしているか見たくってたまらなかったけれども、どうしてもそっちの方を振り向くことができませんでした。でも僕のしたことを誰も気のない様子がないので、気味が悪いような安心したような心持ちでいました。僕の大好きな若い女の先生のおっしゃることなんかは耳に入りは入っても、なんのことだかちっともわかりませんでした。先生もときどき不思議そうに僕の方を見ているようでした。

僕はしかし先生の目を見るのがその日に限ってなんだか嫌でした。そんなふうで一時間がたちました。なんだかみんな耳こすりでもしているようだと思いつつ一時間がたちました。

教場を出る鐘が鳴ったので僕はほっと安心してため息をつきました。けれども先生が行ってしまつと、僕は僕の級でいちばん大きな、そしてよくできる生徒に、

「ちょっとこっちにおいで。」と肘のところをつかまれました。僕の胸は、宿題を怠けたのに先生に名を指されたときのように、思わずどきんと震え始めました。けれども僕はできるだけ知らないふりをしていなければならぬと思つて、わざと平気な顔をしたつもりで、しかたなしに運動場の隅に連れていかれました。

「君はジムの絵の具を持ってきているだろう。ここに出したまえ。」

そう言つてその生徒は僕の前に大きく広げた手を突き出しました。そう言われると僕はかえつて心が落ち着いて、

「そんなもの、僕持ってやしない。」と、ついでたらめを言つてしまいました。そうすると三、四人の友達と一緒に僕のそばに来ていたジムが、

「僕は昼休みの前にちゃんと絵の具箱を調べておいたんだよ。一つもなくなってはいなかったんだよ。そして昼休みがすんだら二つなくなっていたんだよ。そして休みの時間に教場にいたのは

7 【耳こすり】耳もどてそつとさかやくこと。

君だけじゃないか。」と少し言葉を震わしながら言い返しました。

僕はもうだめだと思うと急に頭の中に血が流れ込んで顔が真っ赤になったようでした。すると誰だったかそこに立っていた一人がいきなり僕のポケットに手を差し込もうとしました。僕は一生懸命にそうはさせまいとしましたけれども、多勢に無勢でとてもかかないません。僕のポケットの中からは、みるみるマーブル玉（今のビー玉のことです）や鉛のメンコなど一緒に、二つの絵の具の塊がつかみ出されてしまいました。「それ見ろ。」と言わんばかりの顔を、子供たちは憎らしそうに僕の顔をにらみつけました。僕の体はひとりでにぶるぶる震えて、目の前が真っ暗になるようでした。いいお天気なのに、みんな休み時間をおもしろそうに遊び回っているのに、僕だけは本当に心からしおれてしまいました。あんなことをなぜしてしまったんだらう。取り返しのつかないことになってしまった。もう僕はだめだ。そんなに思うと弱虫だった僕は寂しく悲しくなってきた、しくしくと泣きだしてしまいました。

「泣いて脅かしたってだめだよ。」とよくできる大きな子がばかにするような、憎みきったような声で言って、動くまいとする僕をみんなで寄ってたかって二階に引っぱっていかうとしました。僕はできるだけ行くまいとしたけれども、とうとう力まかせに引きずられて、はしご段を上らせられてしまいました。そこに僕の好きな受け持ちの先生の部屋があるので。

やがてその部屋の戸をジムがノックしました。ノックするとは入ってもいいかと戸をたたくことなのです。中からは優しく「お入り。」という先生の声が聞こえました。僕はその部屋に入るときほど嫌だと思ったことは又とありません。

なにか書きものをしていた先生は、どやどやと入ってきた僕たちを見ると、少し驚いたようでした。が、首のところてぶつりと切った髪の毛を右の手でなで上げながら、いつものとおりの

優しい顔をこちらに向けて、ちょっと首をかしげただけでなんのご用というふうをしなさいました。そうするとよくできる大きな子が前に出て、僕がジムの絵の具をとったことを詳しく先生に言いつけました。先生は少し曇った顔つきをして真面目にみんなの顔や、半分泣きかかっている僕の顔を見比べていなさいましたが、僕に「それは本当ですか。」ときかれました。本当なんだけれども、僕がそんな嫌なやつだということを、どうしても僕の好きな先生に知られるのがつらかったのです。だから僕は答える代わりに本当に泣きだしてしまいました。

先生はしばらく僕を見つめていましたが、やがて生徒たちに向かって静かに「もう行ってもうございます。」と言って、みんなを帰してしまわれました。生徒たちは少しもの足らなそうにどやどやと下に降りていってしまいました。

先生は少しの間なんとも言わずに、僕の方も向かずに、自分の手の爪を見つめていましたが、やがて静かに立ってきて、僕の肩のところを抱きすくめるようにして「絵の具はもう返しましたか。」と小さな声でおっしゃいました。僕は返したことをしっかり先生に知ってもらいたいので深々とうなずいてみせました。

「あなたは自分のしたことを嫌なことだと思っていたんですか。」

もう一度そう先生が静かにおっしゃったときには、僕はもうたまりませんでした。ぶるぶると震えてしかたがない唇を、かみしめてもかみしめても泣き声が出て、目からは涙がむやみに流れてくるのです。もう先生に抱かれたまま死んでしまいたいような心持ちになってしまいました。

「あなたはもう泣くんじゃない。よくわかったらそれでいいから泣くのをやめましょう、ね。次の時間には教場に出ないでもよろしいから、私のこのお部屋にいらっしやい。静かにしてここに

5 【メンコ】薄く小さい、丸や四角の形をした遊び道具。

14 【はしご段】はしごのように、段と段の間に隙間がある階段。

いらっしやい。私が教場から帰るまでここにいらっしやいよ。いい。」とおっしやりながら僕を長椅子に座らせて、そのときまた勉強の鐘が鳴ったので、机の上の書物を取り上げて、僕の方を見ていられましたが、二階の窓まで高くはい上った葡萄蔓から、一房の西洋葡萄をもぎって、しくしくと泣き続けていた僕の膝の上にそれを置いて、静かに部屋を出ていきなさいました。

一時がやがやとやかましかった生徒たちはみんな教場に入って、急にしんとするほど辺りが静かになりました。僕は寂しくって寂しくってしようがないほど悲しくなりました。あのくらい好きな先生を苦しめたかと思うと、僕は本当に悪いことをしてしまったと思いました。葡萄などとても食べる気になれないで、いつまでも泣いていました。

ふと僕は肩を軽く揺すぶられて目を覚ましました。僕は先生の部屋でいつのまにか泣き寝入りをしていたとみえます。少し痩せて背の高い先生は、笑顔を見せて僕を見下ろしていられました。僕は眠ったために気分がよくなって今まであったことは忘れてしまって、少し恥ずかしそうに笑い返しながら、慌てて膝の上から滑り落ちそうになっていた葡萄の房をつまみ上げましたが、すぐ悲しいことを思い出して、笑いも何も引っ込んでしまいました。

「そんなに悲しい顔をしないでよろしい。もうみんなは帰ってしまいましたから、あなたもお帰りなさい。そして明日はどんなことがあっても学校に来なければいけませんよ。あなたの顔を見ないと私は悲しく思いますよ。きっとですよ。」

そう言って先生は僕のカバンの中にそっと葡萄の房を入れてくださいました。僕はいつものように海岸通りを、海を眺めたり船を眺めたりしながら、つまらなく家に帰りました。そして葡萄をおいしく食べてしまいました。

けれども次の日が来ると僕はなかなか学校に行く気にはなれませんでした。おなかが痛くなれ

ばいいと思ったり、頭痛がすればいいと思ったりしたけれども、その日に限って虫歯一本痛みもしないのです。しかたなしにいやいやながら家は出ましたが、ぶらぶらと考えながら歩きました。どうしても学校の門に入ることはできないように思われたのです。けれども先生の別れのときの言葉を思い出すと、僕は先生の顔だけはなんといっても見たくてしかたがありませんでした。僕が行かなかつたら先生はきっと悲しく思われるにちがいない。もう一度先生の優しい目で見られたい。ただその一事があるばかりで僕は学校の門をくぐりました。

そうしたらどうでしょう、まず第一に待ちきっていたようにジムが飛んできて、僕の手を握ってくれました。そして昨日のことなんか忘れてしまったように、親切に僕の手を引いて、どぎまぎしている僕を先生の部屋に連れていくのです。僕はなんだかわけがわかりませんでした。学校に行ったらみんなが遠くのほうから僕を見て「見ろ。泥棒のうそつきの日本人が来た。」とても悪口を言うだろうと思っていたのに、こんなふうにされると気味が悪いほどでした。

二人の足音を聞きつけてか、先生はジムがノックしない前に、戸を開けてくださいました。二人は部屋の中に入りました。

「ジム、あなたはいいい子、よく私の言ったことがわかってくれましたね。ジムはもうあなたから謝ってもらわなくなってもいいと言っています。二人は今からいいお友達になればそれでいいんです。二人とも上手に握手をなさい。」と先生はにこにこしながら僕たちを向かい合わせました。僕はでもあんまりかってすぎるようでもじもじしていますと、ジムはぶら下げている僕の手をいそいそと引っぱりだして固く握ってくれました。僕はもうなんと言ってこのうれしさを表せばいいのかわからないで、ただ恥ずかしく笑うほかありませんでした。ジムも気持ちよさそうに、笑顔をしていました。先生はにこにこしながら僕に、

「昨日の葡萄はおいしかったの。」と問われました。僕は顔を真っ赤にして「ええ。」と白状するよりしかたがありませんでした。

「そんならまたあげましょうね。」

そう言っ、先生は真っ白なりンネルの着物に包まれた体を窓から伸び出させて、葡萄の一房をもぎ取って、真っ白い左の手の上に粉の吹いた紫色の房をのせて、細長い銀色のはさみでまん中からぶつりと二つに切って、ジムと僕とにくださいました。真っ白いてのひらに紫色の葡萄の粒が重なってのっていたその美しさを僕は今でもはっきりと思い出すことができます。

僕はそのときから前より少しい子になり、少しはにかみ屋でなくなったようです。

それにしても僕の大好きなあの子のいい先生はどこに行かれたでしょう。もう二度とは会えないと知りながら、僕は今でもあの先生がいたらなあと思えます。秋になるといつでも葡萄の房は紫色に色づいて美しく粉を吹きますけれども、それを受けた大理石のような白い美しい手はどこにも見つかりません。

〈出典 『日本児童文学名作集(下)』(岩波書店、一九九四年)〉

【著者】有島 武郎(ありしま たけお)

一八七八(明治二二)年—一九三三(大正二二)年

作家。東京都の生まれ。

【著書】『或る女』『カインの末裔』など

4 【リンネル】亜麻の繊維を使った織物。薄く、光沢がある。